

兵庫県のトラハナムグリとヒラタハナムグリ

(兵庫県甲虫相資料・95)

高橋 寿郎

コガネムシ類 (Scarabaeidae) の中でハナムグリ亜科 (Cetoniinae) に属するトラハナムグリ族 (Trichiini) とヒラタハナムグリ族 (Valgini) の仲間は日本産の種も少なければ兵庫県産の種も少ない。比較的多く産する種がいるかと思えば仲々お目にかかることの出来ない種もふくまれている。

そこで現時点でこれ等ハナムグリ各種が県下にどの様に分布しているのかを眺めて見ることにした。

Tribe Trichiini トラハナムグリ族

1. *Osmoderma opicum* Lewis, 1887

オオチャイロハナムグリ

本種は1887年 G. Lewis 氏によって中禅寺、日光、今市で1881年8月採集された3♀♀で新種記載されたものである (Wiener Ent. Zeit., VI, p. 49)。

新島、木下両博士により図説されたのが邦文で初めてのものであると考えられる (Res. Bull. Coll. Exp. Forest, Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ., Sapporo, ii(2): 187, Taf. VI, f. 6, 1923)。

Harold氏はDr. Hoffmanの東京からの採集品で日本から *O. barnabita* Motschulsky を記録された (Deut. Ent. Zeit., X VII, Heft. 1, p. 12, 1878) が Lewis氏は本種のことであろうとされている (Ann. Mag. Nat. Hist., (5) X IX: 199, 1887)。また日本からではないが樺太 Shirarako から松村博士が本種を記録 (Jour. Tohoku Imp. Univ. Agr., p. 120, 1911) されているがこの標本が北大農学部昆虫学教室にないことから真の *O. barnabita* ではないだろうとされている (1923)。
O. barnabita はシベリア、満州、北支に分布する種で Medvedev 氏の図説によると (Fauna CCCP, X, 4, pp. 387—388, f. 990—994, 1960)、♂交尾器は明らかに異なるが前胸背中央の隆起、頭部の隆起の形状も可成り異なる様に思われる。

Osmoderma 属の種は世界の産も種類が少いようで北米、カナダ、中国、ヨーロッパに分布していて W. Junk Col. Cat. (1922) には8種が記録されているだけであり前記 Medvedev氏が1新種を記載 (1960) している

ので9種いることがわかるがその程度しか知られていないようである。どちらにしても本種の分布は本州、四国、九州であるが山地性で個体数の少い種の一つである。

さて本種の兵庫県下の分布状況はどうであろうか。戦前布引での採集は何かの間違いであろう (昆虫界, VI, 54, 1938)。いや摩耶山で神戸県立第一高女の生徒が採集したのは確かだ (昆虫界, VI, 56, 1938) とお互に言い合ったが残念ながら正式の記録は公表されずじまいであった。戦後香川大学におられた中條道夫博士から同校の宮本氏の自宅 (神戸住吉) の前で拾った標本1♀ (22—VIII—1954) を貰ったと手紙で御教示下さった、これが神戸市での唯一の記録である。摩耶山は杉も多いので本種が生息する環境としては別に不足はないがはたして本種がいるのかどうかは全くわからない。県下の中央部から南の地域の本種の産出は現在では一寸期待出来ないのではないだろうか。現在間違なくいることがわかっているのは美方郡の扇の山と養父郡の水ノ山である。水ノ山は所謂の坂の谷方面での産が記録としては多いように思われる。筆者自身未採集なので残念なのであるが小倉氏が採集されるのに同行して実際に拝見した。宍粟郡の音水、赤西溪谷にも産するように思われるが今の所記録が無い。

本種の生態に就いては伊賀正汎氏が報告しておられる (昆虫界, VII, 66, 1939)。大変貴重なものである。県下での珍種の1つであると言えよう。

産地：神戸市住吉 (1♀, 22—VIII—1954, Miyamoto leg. from Dr. M. Chujo's letter)。* 養父郡水ノ山 (坂の谷) (lex., 22—VII—1979, 1♀, 26—VII—1980, O. Ogura leg. 高橋, 1981)。美方郡扇の山 (湯浅, 1961., 辻, 岸田, 1972)。

*産地のところで〔 〕の中のものゝは記録によるもの。
()の中ものは筆者所有標本。記録の文献名は筆者著「兵庫県産甲虫類に関する文献目録。改定版, 1981。」を参照下さい。

2. *Gnorimus viridiopacus* (Lewis, 1887)

アオアシナガハナムグリ

本種は1887年 G. Lewis 氏により日本で4exs. の *Trichius* で *T. subopacus* Mots. に良く似た種を得た、*T. viridiopacus* と名付けたいと *T. subopacus* との区別を掲げられた。之が本種の原因になる (*Wiener Ent. Zeit.*, VI(2): 49)。そして同じ年中禅寺から夏遅く3頭を得たと記録された (*Ann. Mag. Nat. Hist.*, X I X (5): 200)。その後新島、木下両博士の図説 (1923) によって一般に知られるようになった (*Gnorimus* 属として扱われている)。

本属の種は大体ヨーロッパと日本、台湾、シベリア、朝鮮、支那に分布している他の地域にはいないようである。日本にはこの1種のみを産する。

本種に大変似ている *G. subopacus* イブシアシナガコガネは G. Lewis 氏が対馬から5頭得たと記録された。同じ年再び Mr. Bowring がだいぶ前に得ているが1881年に対馬で5頭得た。同時に札幌でも1頭得たとして報告された (1887)。この記録をもとに近藤英夫氏は *G. subopacus* を解説された時、北海道、本州、対馬に分布するとしておられる (*昆虫界*, VIII, 78, 1940)。その後現在に至る迄日本での記録が全く見られない。対馬に産することに就いては野村氏が Lewis 氏の北九州の島の標本には朝鮮のものと思われるコガネムシが3種もあるのでこの種の分布は保留しておいた方がよいとされている (対馬の生物, 1976)。従って現在の日本には本種を産しないと見てよいであろうと思われる。筆者の手許にも朝鮮道逸山産 1♂ 1♀ (7-V-1939, Noda leg.) 並びにソ連プリモルスク地方産 1♂ (9-VII-1960) があるが色彩ではアオアシナガハナムグリにもや、似たのがあるが概ね上翅において赤味を帯びた茶褐色を呈し鈍い光沢を有し、斑紋が異り♂交尾器にも差異が認められる。

イブシアシナガハナムグリとアオアシナガハナムグリは日本と大陸との対応種関係にあると考えられる。

アオアシナガハナムグリは北海道、本州、四国、九州に分布している山地の花に集る種でそれ程多くいる種ではないように思われる。兵庫県下での記録は僅か1例があるだけで分布状況のよくわからない種の1つである。

千種川上流地域と接する鳥取県側の沖ノ山の北西、芦津～北股川、八河谷～稜木谷川流域には本種が極めて普通に生息しているという記録がある (恩藤、江原、1974) のでこの千種川沿の流域とかささらに三室山麓一带に本種が分布している可能性は大である。

産地：氷上郡神楽村 [山本, 1952, 1958]。

3. *Trichius japonicus* Janson, 1885

トラハナムグリ

本種も大変きれいなハナムグリであるが案外と兵庫県での個体数の少い種の1つである。

本種は Janson 氏により日本を産地として1885年新種記載されたものである (*Cist. Ent. Pars. XXIX*(3): 152)。その後 Lewis 氏は1880年6月、日光のウツギの花から得た。これは一番南に属する産地である。同じ年8月7日は札幌では大変多くいた。巨大なアンゼリカの花に来ていて、それは手のとゞく所から数フィート離れて風に変強くゆれ動いて傘をさかさにした採集法ではとりにくかったと、*T. fasciatus* L. が日本から記録されているが之は誤りで本種のことであると記しておられる (1887)。ところが Lewis 氏がこのように述べておられるにもかゝらず日本では樺太、シベリア、ヨーロッパに分布している *T. fasciatus* を本種と間違えて同定されたから戦前の日本の図鑑はほとんどが日本産を *T. fasciatus* として取扱っており日本に *T. fasciatus* を産すると取扱っている文献もある。これが間違であることは沢田玄正博士が1939年に指摘をされた (日本の甲虫, 3巻, 1号)。

即ち日本に産するのは *T. japonicus* だけである。

戦前日本であった樺太だが当時でも樺太に採集に行くことは仲々大変であった。筆者はそのころ樺太に旅行された友人が豊原で採集された *T. fasciatus* 数頭の内1♂ (18-VII-1938) を頂いて今でも大切に所有している。他にチェッコスロバキアの標本も所有しているが上翅の斑紋が *T. japonicus* と違ふし、体長もや、大形である。

T. japonicus は日本特産種で北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道には多くいるようである。

兵庫県の記録は初めに記したように広く分布しているようであるが個体数が大変少いのか記録としては少いし、筆者の採集も僅かである。

生態に就いての報告はしらない。♂は尾節板の先端が中高に突出、♀では2瘤状。

産地：宝塚市武田尾 [関, 1934]。加西市畑 (1♂, 17-VI-1974)。揖保郡 [大上, 1907]、鷄籠山 (1♂, 27-V-1970)。宍粟郡音水 [2exs., 13-VII-1958, M. Goto leg.]。氷上郡 [山本, 1958]。豊岡市上陰 [高橋, 1975]。養父郡熊次 [奥谷, 1955]、氷ノ山 [1♂, 30-VII-1957, Fujita leg.] (1♂, 17-VII-1971, K. Tsuji leg.)。美方郡扇の山 [湯浅, 1960, 辻・岸田, 1972]。

4. *Trichius succinctus* (Pallas, 1781)

ヒメトラハナムグリ

本種を日本から一番初めに記録したのはG. Lewis氏が1887年Oyayama, Nikko. Sapporo産8exs., で記録され日本では稀らしいと記しておられる。同じ年氏はKioto, Nikko, Sapporo産8exs., であると若干初めてのものと産地が異なる報文を発表しておられる。しかるにLewis氏は1879年にA Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago, p. 14, No.1027に*T. abdominalis* Ménét. (var.) なる種を記録されている。その後Schönfeldt氏がCatalog der Coleopteren von Japan, 1887, p. 79にこれを引用し我が国では松村博士が「日本千虫図解, iii, 1906, p. 98, pl. 48, fig. 98に*T. abdominalis*の学名で本種を取扱い発表された。Lewis氏は1887年に*T. succinctus*を日本から記録されたのは恐らく1879年に記録されたものと全じであろうと思われる。新島、木下両博士の論文では朝鮮産のものを*succinctus*, 日本産を*abdominalis*として区別され(1923)それがそのまゝ踏襲されてきたわけである。

1943年になって沢田玄正博士は日本の種も従来チョウセンヒメトラハナムグリ *T. succinctus* として知られて来た種と何等変ることはないとして表記学名に変更された(関西昆虫学会々報, 13巻, 2号, 1943)。可成り広く分布している種で日本以外済州島、朝鮮、満州、東南シベリア、アスコルド島に分布している。南満州、支那にsubsp. *hananoi* Sawada, 台湾からsubsp. *shirozui* Sawadaの夫々亜種が知られている。台湾産の標本をもっているが日本産より薄い色で斑紋をはっきり表わしている。♂交尾器もやゝ異なる。

生態に就いての報文は見当たらない。♂の尾節板は中高で巾より長い♀ではゆるく中高、前脛節に2外歯があり♀では第1跗節よりもやゝ短く♀では明らかに長い。

本種は神戸市内では普通に採集出来るが意外と県下での記録は少い。案外注意されていないのではないかと思う。恐らく広く分布している種と考えられる。

産地：川辺郡猪名川町〔仲田, 1970〕, 民田〔仲田, 1978〕, 神戸市御影〔関, 1933〕, 烏原(1♂, 4—VI—1939, 1♀, 10—VI—1939, 1♂, 1♀, 9—VI—1940, 1♂, 11♀♀, 1—VI—1941, 2♀♀, 5—VI—1943, 1♀, 10—IV—1949, 1♀, 9—VI—1966, 1♂, 1♀, 1—VI—1969, 1♀, 30—V—1971, 1♀, 2—VI—1974, 1♂, 27—V—1978, 1♀, 10—VI—1980, 1♂, 11—VI—1980, 2♂♂, 1♀, 17—VI—1980), 山の街(1♀, 10—IV—1949), 藍那(1♂, 10—VI—1978), 鴨越, 多井畑〔北村, 1937〕。

神崎郡大河内町川上(1♀, 4—VI—1977)。相生市三濃山(2♂♂, 1♀, 8—VII—1977)。揖保郡〔大上, 1901〕, 鷄籠山(1♂, 27—V—1970)。美方郡扇ノ山〔湯浅, 1964, 辻・岸田, 1972〕。

5. *Paratrichius doenitzi* (Harold, 1879)

オオトラフコガネ

本種は1873—1876年間東京大学南校教師をしていたDönitz Wilhelm氏(1838—1912)がYumoto(湯元)で採集した標本に基いてHarold氏が新種として記載された種である(Deut. Ent. Zeit. XXIII, Heft. II: 366)。記載当時は*Gnorimus*属とされていた。その後G. Lewis氏は6月には蛹から羽化させ、8月にはOyayama, Nihosan, Ontake and Wada-togeの高い森林地帯の花から成虫を見出すことが出来た。Janson氏はYezoからも記録していると報告された(*Paratrichius*属に扱っている)(1887)。

日本特産種で本州・四国・九州に分布している。近縁の種にオオシマオオトラフコガネ*P. duplicatus* Lewisがいる。こちらは奄美大島に産し更に沖縄本島にはsubsp. *okinawanus* Nomura, 台湾にはsubsp. *nomurai* Tesarを産する。

本種は朽木に産卵され、幼虫は朽木の中を食べ進み5—6月頃蛹化次いで成虫となる。本種の幼虫、蛹に就いては宮武陸夫氏の貴重な報文・図説がある(四国昆虫学会々報, 第2巻, p. 1—7, 1951)。

♂の触角片状部は柄部の1.5倍で♀では短いことで簡単に♂♀が見分けられる。また♂♀で色彩を異にするのがその大部分であるが全く逆の現象を呈する個体も得られる。

兵庫県下では山地帯に産して県の中央部から北に多く南側の地域では全く見る事が出来ない。

産地：宍粟郡音水(2♂♂, 13—VII—1958, 1♀, 15—VII—1973)。養父郡水山の山(1♂, 22—VII—1954, Y. Yamamoto leg., 1♂, 1♀, 25—VII—1955, Ishida leg., 3♂♂, 2♀♀, 27—VII—1956, 6♂♂, 6♀♀, 21—VII—1978, 1♂, 25—VII—1959)(高橋, 1975)。美方郡扇の山〔湯浅, 1960., 辻・岸田, 1972, 高橋, 1975〕。

6. *Paratrichius septemdecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven, 1864) ジュウシチホシハナムグリ

本種はVollenhoven氏がJapanから新種記載している(属名は*Trichius*., Tijdsch. Ent. Nederl. p. 159, 1964)。残念ながらこの原記載所有していないので之以上わからないがWaterhouse氏は1875年Tamatsu, near Nagasakiから5月に得た4exs. で♂♀の記載並びに図

示をしておられる (*Trichius*属) (*Trans. Ent. Soc. London*, 1875, p. 115, pl. III, f. 8)。その後Lewis氏は次の如くのべている。即ち“本種は九州からのみ知られている。1881年5月19日 Konose のガマズミの花に珍しくなく。そして同日約20頭程を古丸木から壊して得た。内5頭は全体が赤色であった”(Ann. Mag. Nat. Hist. XIX(5): 196—202, 1887)。

黒色のものと前胸背と上翅または上翅の一部は赤褐色のものとなる。触角片状部は♂では柄部の1.5倍、♀では短い。分布は本州、四国、九州、朝鮮、中支那である。

本種は従来県下からは扇の山の記録があっただけであるが小倉 滋氏は坂の谷のノリウツギから4♂♂, 2♀♀を採集された(内4♂♂筆者保管)。この付近には注意すればいるようである。

産地: 養父郡坂の谷(4♂♂, 2♀♀, 22—VII—1980, S. Ogura leg., 高橋, 1981)。美方郡扇の山広留野(湯浅, 1960., 辻・岸田, 1972)。

Tribe Valgini ヒラタハナムグリ族

7. *Charitovalgus fumosus* (Lewis, 1887)

オオヒラタハナムグリ

本種はLewis氏によりJunsaiのアジサイの花から1880年7月28日得たものと1881年にFukushima, Ontake and Chiuzenjiから得た全部で5exs. をもって新種記載されたものである(Ann. Mag. Nat. Hist. XIX(5): 196—202) (属名はValgus)。

Arrow氏は1913年この種をChromovalgus属に取扱った(Ann. Mag. Nat. Hist., 8, xii, p. 394—408)。沢田博士はその後再びValgus属に入れるべきであるとされた(日本の甲虫, 4巻, 1号, p. 1—4, pl. 1, 1941)。最近野村氏はCharitovalgus属の種として取扱っておられる(原色昆虫大図鑑, II, 追補・正誤表, p. 6, 1978)。この種が何属に属する種であるか。充分な標本を所有しないので若干の不安はあるが次に検討して見る。

Chromovalgus属と言うのは“前脚の脛節は5個の外歯を有しその第三及び第五は大形。頭楯は前端甚だ狭く円錐形をなす。♀の尾節板に棘状突起を有せず”と言うのが特徴であって本種は♀の尾節板に棘状突起を有する種であるからこの属には所属しないと考える。

Valgus属は♀の尾節板真直にして尖りたる長形の突起を有し、その上部は重鋸歯状をなす。前脚の脛節は5個の外歯を有し其の第一・三及び五は大形なりと言

うものである。この属の代表的な種でヨーロッパに広く分布している *V. hemipterus* (Linnaeus) がある。現在手許にコーカサス産の4♂♂があるので見てみるとオオヒラタハナムグリと前脛節の五端刺ではや、こちらの方が第一・三・五歯の大形なのが顕著であるが余り差はない。前尾節前の第五腹節背部両側に突起をオオヒラタハナムグリは有るが之が無い。また *L. hemipterus* の方が上翅が割合短く第五腹節の背面が大きく露出している点やはり可成り違っていてオオヒラタハナムグリはValgus属ではないと考えられる。Charitovalgus属のもの、標本は有しないので若干不安はあるがArrow氏の記載と図(*Fauna British India, Lamell. I*, p. 246, pl. II, fig. 108, 11, 1910)並びに中條博士の図(日本の甲虫, 3巻, 2号, 1940)を見る限りCharitovalgus属に扱う方が良いようである。オオシマヒラタハナムグリも3♂♂所有しているが上記特徴はオオヒラタハナムグリと全じである。

一般に♂は山地の花に集るが♀は朽木から得られる。従来いくらかの亜種に分けられていたが現在では北海道、本州、四国、九州、朝鮮に分布しているものは総てこの種1種のみであり、奄美大島には *C. lateus* Arrow オオシマヒラタハナムグリ、台湾、ネパールには *C. pictus* (Hope) タイワンオオヒラタハナムグリの夫々別種を産する。

兵庫県下では中央部から北に産し少い種だと考えていたが三木の志染中学生の方が市内で採集された本種を見せて下さった。同地の小倉 滋氏の話では三木市内の栗の花で割合得られるとのことであつた。実際に筆者はこの地では未採集であるが可成り南の方に迄分布している種ようである。たゞし全般に個体数がそう多いとは思われない。それと県下産の♀の記録も知らなければ未採集でもある。

産地: 宍粟郡音水(1♂, 13—VII—1958, Kono leg.)。養父郡水ノ山(1♂, 27—VII—1956, 1♂, 21—VII—1958)(高橋, 1959), 坂の谷(1♂, 22—VII—1979)。美方郡扇の山(湯浅, 1960, 辻・岸田, 1972)。

8. *Dasyvalgus tuberculatus* (Lewis, 1887)

トゲヒラタハナムグリ

本種はLewis氏が1881年7月28日Fukushima, 8月6日Kurigahara Usuitogeで見出したもので新種記載されたものである(Valgus属として)(Ann. Mag. Nat. Hist. XIX(5): 196—202, 1887)。Arrow氏は1913年Dasyvalgus属に取扱れた(Ann. Mag. Nat. Hist. (8)XII, p. 396, 407, 1913)。

本種は本州と四国に分布することが知られている。

兵庫県下ではどちらかと言えば山地性のようで南側にはほとんど見られなく県中央部から北に分布している。成虫は5, 6月頃割合多く得られる。音水に産するものは黒味がかった個体が比較的多い。

産地：飾磨郡雪彦山 (lex.,14—VIII—1957)。多可郡三谷 (lex.,8—VI—1975), 鳥羽 (4exs.,1—VI—1975)。神崎郡大河内町川上 (lex.,4—VI—1977)。宍粟郡福知溪谷 (3exs.,20—VI—1976), 音水 (lex.,31—V—1970, 5exs.,11—VI—1972, lex.,13—V—1973, lex.,3—VI—1975, M. Yuma leg.), 赤西 (lex.,27—V—1979)。水上郡神楽, 小金岳〔山本, 1958〕。養父郡氷ノ山 (lex.,22—V—1954, lex.,25—VII—1955)〔高橋, 1975〕。美方郡扇の山〔湯浅, 1960., 辻・岸田, 1972〕。

9. *Nipponovalgus angusticollis* (Waterhouse, 1875)

ヒラタハナムグリ

Waterhouse 氏により日本国中(対馬を含む)に最も普通にいる種として新種記載された(タイプの指定は無い。Valgus属)(Trans. Ent. Soc. London, 1875, p. 115)。1887年Lewis氏は1880年の3月13日に松の径4インチばかりの全く腐った丸太を壊した所50exs.程がころがり出た。この季節以後はほとんど花上で得られる。特にrape-fieldsとかイヌバラ上に多いと記録された(Ann. Mag. Nat. Hist. (5)XIX, 1887, p. 201)。沢田玄正博士は前脛節は7歯を有し、前胸背は上翅よりも余り巾の狭くない点等を特徴に *Nipponovalgus* 属を創設それにふくめられた(日本の甲虫, 4巻, 1号, p. 1—14, pl. 1, 1941)。

兵庫県下でも極めて普通種である。詳しい生態の報告は無いようであるが松の樹皮下にかたまっているのを採集出来たりする。一般に針葉樹の朽ち木の中にあることが多い。幼虫もそれ等の木の中で生活しているようである。従って♀の採集は割合困難である。♀の上翅は短く、中・後跗節は♂では脛節の2倍、♀では短い。特に後跗節の第1節は♀で第二・三節の和と異同長である。

産地：洲本市安乎町〔堀田, 1959, 1974〕。津名郡津名町大町〔堀田, 1979〕。川辺郡猪名川町上阿古谷, 木間生〔仲田, 1978〕。川西市笹部〔仲田, 1978〕。Hiogo〔Schönfeldt, 1877〕。神戸市御影〔関, 1933〕, 摩耶山〔増田・橋本, 1941〕, 森林植物園(2♂♂, 28—IV—1960), 烏原(2♂♂, 2—VI—1939, 1♂, 5—VI—1939, 1♂, 4—VI—1939, 3♂♂, 22—V—1938, 1♂, 29—IV—1938, 1♂, 4—V—1980, 1♂, 4♀♀, 9—IV—1981), 山の街(1♂, 29—

IV—1957), 箕谷(6♂♂, 9—V—1948), 鉢伏山〔北村, 1937〕, 妙法寺〔鳥居, 1961〕(1♂, 22—II—1979), 藍那(1♀, 5—VI—1978), 舞子(12♂♂, 5—V—1939)。多可郡白山(2♂♂, 3—V—1973), 三谷(1♂, 3—V—1955, 1♂, 24—V—1975, 1♂, 8—VI—1975), 鳥羽(2♂♂, 29—IV—1972, 1♂, 1—VI—1975)。神崎郡大河内町川上(1♂, 15—VIII—1977)。飾磨郡家島〔畑中・辻, 1974〕(1♀, 26—V—1978)。相生市三濃山(3♂♂, 7—V—1972, 1♀, 6—VII—1973, 1♀, 12—V—1974, 1♂, 18—V—1974, 2♂♂, 1—VI—1974)。揖保郡〔大上, 1907〕。佐用郡大撫山(1♀, 25—IV—1976)。宍粟郡福知溪谷(1♀, 3—VI—1975, 2♂♂, 16—VI—1975, M. Yuma leg., 1♀, 20—VI—1976), 音水(1♀, 20—VI—1959, 3♂♂, 10—V—1970, 2♂♂, 31—V—1970, 2♀♀, 11—VI—1972, 1♀, 24—V—1973, 1♂, 3—VI—1975, M. Yuma leg.)。水上郡〔山本, 1958〕。城崎郡城崎(1♂, 17—V—1970), 三川山〔高橋, 1975〕。豊岡市妙楽寺〔高橋, 1975〕。養父郡氷ノ山〔高橋, 1959〕。美方郡扇の山〔湯浅, 1960., 辻・岸田, 1972〕。

以上9種に就いての県下での分布を中心に述べたが日本の本州に分布している種は全部兵庫県にも分布していることがわかる(全種、原色昆虫大図鑑, II, 1963に図説されているので形態の記載は省いてある)。

まだ県下で調べられていない地もあるし分布の充分わからない種もあり生態に就いても不十分な点が多いので調査を続けなければいけないと考えている次第である。

(20—IX—1981)

(S.45: TOSHIRO TAKAHASHI

神戸市

)

村岡町大笹にてコキマダラセセリを採集

広畑政己

1981年7月26日に大笹(北鉢伏山)の標高800m付近で本種の1♀を採集したので報告する。

県下では中北部の段ヶ峯、須賀ノ山、扇ノ山、千ヶ峯、笠形山、栃原、杉ヶ沢などの記録があるが、大笹では初記録のように思われるので報告した。

時期的に遅いということもあるが、個体数は少なくとも他に1頭見かけただけである。

(S.28: MASAMI HIROHATA 姫路市

)